都留文科大学

地域交流センター通信 20

December 2011, Volume 20

題字　黒部行子
絵　　成瀬洋平（本学卒業生）

特集

地域・故郷を思う
―東日本大震災と私たち―

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

1）地域交流に関するプロジェクトの推進
2）学校の先生方などの教育相談
3）地域のニーズに応えた貢献活動
4）さまざまな地域交流の連携の推進

巻頭文

東日本大震災の被災地支援に参加して考えたこと……近藤直司……4～5

特集　地域・故郷を思う　―東日本大震災と私たち―

私が体験したあのとき……澁谷　咲……6～7
祖父母たちを失う…まずは受け入れること……他力桃子……8
悔いのないように生きよう　不安のときを経験して……江尻留美……9
生きること、生かされること　―私の震災体験……大平栄子……10～11
学生たちによる災害ボランティア活動の経過報告……高田　研……12～15
釜石での学生たちによるボランティア経験より……編集部……16～17
〈ボランティアする側の心〉を気遣う……川崎　倫……18
「被災者にとっての心のケアを考える」に参加して……分部勝規……19
被災した教師の語りから、「日常」を問い直す……筒井潤子……20～21
危機的状況下におけるメディア……佐々木大祐……22
教授会のみなさまへ　社会学科学科会議……23
福島県からの自主避難者による講演……泉　桂子……24
小林さんのお話のまとめ……菰田翔子……24
小林さんのお話を聞いて……望月　恵……24～25
小林英子氏からのお便り……25

3・11の都留文科大学　～一職員の記憶ノート～……今泉圭一朗……26
都留文科大学夏期節電対策について……高山竜一……27

トピックス

情報を共有する観察会……西　教生……28
「文大農作物マーケット」の実績・意義・展望について……狩野　航……29
笑顔あふれる「Ｈｅｌｌｏ！英語でワクワク」……奥脇奈津美……30
ぜひ続けてください！……井上玉貴……31
人権紙芝居「たねをまこう」の制作にかかわって……酒巻洋一……32
研究報告会を開催して……植村憲治……33
「現職教員教育講座」の感想
～学ぶ楽しさの実感できる授業づくりを～……堀内美紀子……34
大田堯先生の映画「かすかな光」上映会に参加して……新藤浩伸……35
編集後記……畑潤・田中夏子……36

表紙・裏表紙の絵：成瀬洋平（本学比較文化学科卒業生）

参加して考えたこと

■ 近藤直司

東日本大震災への対応として、山梨県福祉保健部は障害福祉課と精神保健福祉センターを中心に「山梨県こころのケアチーム」を編成し、3月25日から宮城県塩竈保健所に派遣しました。その後、4月からは宮城県気仙沼保健所、7月からは岩手県宮古保健所管内の山田町にも隔週でチームを派遣してきました。私自身は3月25日からの塩竈とゴールデンウィーク中の気仙沼にそれぞれ5日間ずつ、その後、7月からは山田町の支援活動に参加してきました。

まず、こころのケアにおけるニーズ・支援課題の移り変わりについて述べます。3月11日からちょうど2週間目の塩竈市や多賀城市は混沌とした状況でした。倒壊した家屋や瓦礫が市街地や住宅地にまで拡がり、大規模な避難所がいくつも設置されていました。この頃の精神科医療ニーズは、慢性疾患の治療のため継続的に内服していた薬をなくして困っている、認知症のお年寄りが避難所で徘徊してしまうといったケースの他、地震や津波の恐怖から急性錯乱を来したケースもありました。こころのケアにおける「急性期」と言える時期だったと思います。

現在は急性期を過ぎ、生活上の問題と関連したニーズが増えています。たとえば5ヶ月以上もの避難所生活を送ってこられた方々が8月末には仮設住宅などに移られ、そのことで新たな問題が生じてくるようです。山田町の旧中心部にあった公民館、図書館、飲食店、商店、病院、工場、漁協などはすべて津波に流され、火事で焼失しました。仮設住宅は旧中心地周囲の山間部に建てられた小規模なものが多く、極めて不便で孤独な生活環境に置かれている高齢者も少なくないようです。たとえば不眠を訴える高齢者の女性に話を伺ってみると、具体的な心配事は「デイサービスが再開していないために認知症の夫を独りで介護しているが、いつ誤飲するか心配で仕方がない」「仮設住宅に手摺りが少ないので、夫が転倒しないか心配」と述べておられました。

その他にも、さまざまな生活上の困難が山積している状況です。大切な家族を亡くされた方と同時に、家族を亡くされた人を支えようとする周囲の方々の心労も重なってきているようです。

◇

9月上旬の派遣の際には、子どもたちに関する話題が増えてきたことを感じました。活動内容も、保育所に勤務する保育士さんや小さいお子さんを養育しておられるお母さん方を対象としたメンタルヘルス講座や、仮設住宅への入居に伴って転校した学校で不登校になったお子さんに関するケース協議やコンサルテーションのために児童相談所や学校に伺うなど、子どもたちに関する活動・支援が中心でした。

山田町に派遣しているチームは児童・思春期の精神科医療に携わっている精神科医を中心に、保健師、心理・福祉職などで編成されています。全体的な支援体制が少しずつ整いつつあり、それぞれの専門性に応じて役割を分担することができるようになってきたものと思われます。

深刻な被災を経験した小さいお子さんには、数日間は怖がって親から離れない、災害の映像を怖がる、甘えが強くなるなど、さまざまな情緒・行動上の反応がみられていたようです。お子さんの多動や粗暴行為への対応に疲弊し、親御さんが抑うつ的になっているケースもありました。高校生のことも心配です。避難してきた親戚・知人に気を遣い、明るく気丈に振る舞っていたものの、ずいぶん後になってから、些細な刺激で幼児のように「怖い」と泣きじゃくるようになっ

たという女子高校生の話を伺いました。住民の方々や地元の援助者がようやく子どもたちの心に目を向ける余裕が生まれてきたのかもしれませんし、子どもたちがようやく周囲にSOSを出せるようになってきたとも言えそうです。

◇

現在、被災地では生活再建の進み具合や生活状況にみられる較差が時間の経過とともに拡大しています。8月中旬の盛岡駅周辺には、楽器を担いだ高校生や日焼けしたテニス少年などの姿も多くみられ、日常生活が回復しつつあることが窺われました。また、この頃から宮古の市街地でも店舗を改修して営業を再開する飲食店が増えてきました。盛岡から宮古は約90㎞、車で2時間ほどかかり、山田町まではさらに30分を要します。生活状態や復興のスピードには確かに較差を感じますが、山田町に関して言えば、内陸や宮古からの「遠さ」が心理的な距離感につながり、そのことが、さらなる較差の拡大を生じさせているようにも思われます。

今回の震災で直接的には大きな被害を受けることのなかった私たちだけでなく、盛岡など内陸部の人たちにとっても山田町の状況を身近に感じ続けること、関心を向け続けることが難しいのではないかと想像されます。今後も沿岸部に住む方々のことを常に意識しておかなければならないと思います。また、被災地から山梨県に移って来られている方もおられます。できるだけ不便を感じずに、少しでも希望をもって生活していただけるよう心がけたいものです。

（こんどう　なおじ・都留児童相談所・所長）

＊関連記事が19ページにあります。

東日本大震災の被災地支援に

山田町健康福祉課が町内の保育士さんを対象に企画した「被災した子どもに関するメンタルヘルス講座」の風景

特集

地域・故郷を思う

— 東日本大震災と私たち —

3・11。地震、津波、そして福島第一原発。日本中が言葉を失いました。東日本大震災（福島第一原発を含む）は、被災地のみならず、私たちすべての人間に「不安」を与えています。同時に私たちに、今日の社会・暮らしをより深く考えることを促してもいます。

しかし、この〝現在進行形〟で経験しつつあることは、きわめて深刻かつ巨大な事象であり、簡単に〝分かる〟というふうにはならないものでしょう。今は、多くの〝悲惨〟と〝勇気〟を含む、無数の経験や取組みを丁寧に見つめ、交流していくことが大事でしょう。

とりわけ都留文科大学には、東北出身者を含め全国から学生たちが集まっているわけですが、それぞれに不安を抱く状況にあります。それで本号は、当初方針を変更し、「地域・故郷を思う—東日本大震災と私たち—」という特集を組むことにしました。この特集によって、先ずはお互いの身近な経験や思いを記し、交流しようと考えました。このような自主的な表現と交流の積み重ねを通して、私たちの観察力、考察力がゆたかになっていくことを願っています。編集にあたっては教授会でも情報提供のお願いをし（7月13日）、早速のご協力を得ることができました。こうして7月中にはほぼ原稿依頼を終えました（中には春の段階の原稿もあります）。

特集は、学生・教員の被災経験、学生たちのボランティア活動、関連講座、教員による調査報告、関連講演会、社会学科提案資料、福島県からの自主避難者の講演、大学職員による記録、という編成をとりました。なお、本号中のいくつかのタイトル（あるいはサブタイトル）は、当事者には書きにくいであろうと思いながら、読者の便宜を図って編集部で付けました。

私が体験したあのとき

■澁谷　咲

私の地元は宮城県石巻市です。春休みだということで、震災当時わたしは石巻市にいました。地震が起きたときは車の免許試験を受け、免許証を取得した帰り道でした。雪がたくさん降っていました。傘がなかったので、傘を買おうと百円ショップに寄って、傘を選んだ瞬間に、揺れが始まりました。始めは小さな横揺れで、直ぐに治まるだろうと思ってその場に立っていましたが、ぐらぐらっと強い揺れが来て、立っているのが困難で、前かがみになりながら急いで店の外に出て、店の中にいた店員さんやお客さんみんなと手をつなぎ輪になりながら揺れが治まるまで地面に座っていました。体の震えが止まり

ませんでした。

揺れが治まるとすぐに大きなサイレンが鳴り、大津波警報を知らせる放送がありました。それらの音も鳴り止むことはありませんでした。私の家までは徒歩でそこから二時間半はかかるほど離れていました。まさか、津波なんて来るわけないと思い、海沿いの道を祖母が心配だったので歩いて帰ることに決めました。1時間ほど歩くと石巻駅に着きました。目の前には石巻市役所。携帯電話の電源が切れていたので、公衆電話から父と連絡をとりました。父が「迎えに行くからその場で待機してろ」と言われ、待機していると、市役所職員の「津波来てるからはやく市役所に避難して」の声。結局その日は家族と合流できませんでした。誰かと連絡を取りたくてもできずに、家族や友人が無事なのかもわからず、不安と寒さのなか避難所生活をし、三日が過ぎました。

結局、家族全員と合流できたのは四日後。町は変わり果て、自宅は床上浸水し、ヘドロで汚れ、祖母の家は全壊し住めなくなりました。一瞬で全てのものがなくなる虚しさ。

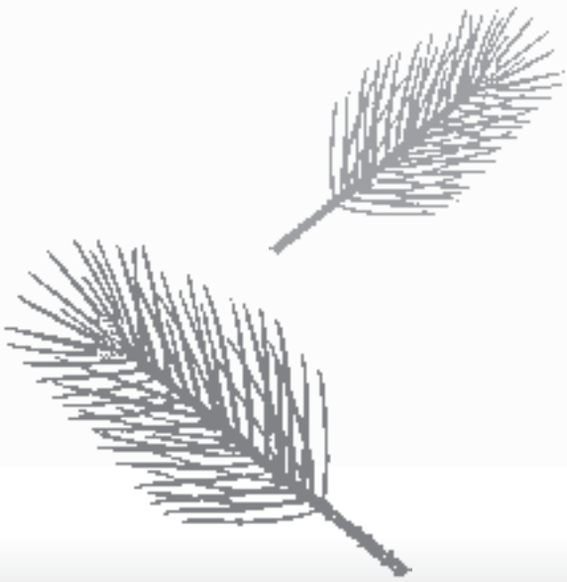
被災した人々のいったい誰が、このような甚大な被害になると予想できたでしょうか。きっと、みんな津波といっても数十センチで、多くの人の命や家屋が失われることになるとは思いもしなかったでしょう。数十年前から大きな宮城県沖地震が来るとは言われていましたが、それに備えての準備は疎かだったと思います。また、耐震設計ではあったとしても、大津波は想定外だったと思います。まだライフラインも整っていない中、被災地の皆さんは、助け合い励ましあい、元気に笑顔で頑張っています。

私が言いたいことは、今後あのような大きな災害が起きたときに備えて、それぞれができる対策をすること、例えばすぐに避難できる準備をしておくことが必要です。津波で逃げ遅れた人もたくさんいるからです。また被災地の人ではなくても、いざ自分の身の回りに起きたときのことを想定しておく必要があります。ひとごとで済ませてはいけません。これは世界の問題です。

さらに、最も主張したいことはみなさんの今ある命を大切にして、日々を一生懸命生きてほしいということです。私自身、今回あと3分の差で命を落とすところでした。私の身近にも亡くなった人がたくさんいることから、人はいつ急に死ぬのかなんてわかりません。だからこそ、毎日を大切に、後悔のないように、周りに感謝しながら生きていこうと心に決めました。一人ひとりの今ある命を大切に…。

（しぶや　さき・英文学科 3年）

瓦礫が散乱する祖母の家
（宮城県石巻市渡波（わたのは））



祖父母たちを失う…まずは受け入れること

■他力桃子

私は、3月11日の震災で、祖父母と曾祖母を亡くしました。震災のちょうど一週間前には、私と母親と祖父母の4人で温泉旅行に行き、楽しい思い出を作ったのですが、それも今では悲しい思い出となってしまいました。

祖父母の家は宮城県南三陸町の志津川でお茶屋を経営していました。港町で、街中を散歩するとウミネコの鳴き声がし、潮の匂いがする…そんな素敵なところでした。

震災から半年以上が経った今でも、まだ祖父母がいなくなってしまったなんて信じられません。つい先日、祖父母たちの携帯電話の手続きを解約しました。そのため、もう電話をかけても繋がらないのですが、ふと繋がるような気がしてしまって、電話をかけたりメールをしたりしてしまいます。

ときどき、被災地の方々や、ボランティアの方々、日本中が復興に向かって頑張っている中で、私だけ取り残されてしまったような気持ちになることがあります。被災地の方と違って、私自身の家や故郷が震災にあったわけではないので、瓦礫が撤去され、少しずつ復興していく南三陸町の様子を見ていても、どこか心の中に「どんなに復興してもおばあちゃん達は戻ってこないからなあ…」という気持ちをもってしまっています。私の気持ちは、震災から半年経っても、直後の時からあまりいい方向にいってないのです。

遺体はまだ見つからないのですが、家には、仏壇が設けてあります。手を合わせなきゃ、とは思うのですが、どうしても、手を合わせて目をつぶると変な感じがして、すぐに涙が出てくるのでできません。多分祖父母たちの死を受け入れるのが嫌なのだと思います。

被災地で、もっともっと苦しい思いをしている人がたくさんいるのに、いつまでも私がうじうじしていたらいけません。祖父母たちもきっと、ずっと私が悲しんでいたら、天国で困ってしまうでしょう。早く祖父母たちの死を受け入れて気持ちを前に向けることが私の今一番やるべきことです。

（たりき　ももこ・国文学科2年）

弟が遺品として祖父母の家の床板を剥がして持ち帰ろうとしています。
（宮城県三陸町）

悔いのないように生きよう
不安のときを経験して

■江尻留美

私の実家は福島県いわき市にあります。夏は涼しく、冬は暖かく、とても住みやすい土地だと言われていました。そんないわき市が3月11日に大きな揺れに襲われました。その揺れで私の実家は全壊してしまいました。

その日、私は都留にいたので実家の状況が全く分からず、大したことはないだろうと思っていました。しかし、大きな揺れが起こってから、携帯電話の電波の状態が悪く、家族と連絡を取ることができませんでした。そんななか、テレビでは地震の被害状況を放送していました。津波の跡、崩れた建物、燃える家…それは私の不安を煽るものばかりで、呑気にしていられる状況ではないことを徐々に感じていきました。そして、家族と連絡が取れないことにとても不安を覚えました。テレビに福島県の様子が映ったときは、言い表すことのできない不安でいっぱいでした。

連絡が取れたのは地震が起こった次の日の夜でした。母親の声を聞いたときは、本当に涙が止まりませんでした。家族も親戚もみんな無事だと聞いたときは、本当に安心しました。このことがあって、改めて私のなかの家族という存在の大きさを知りました。もしも家族の誰かが亡くなっていたら、行方不明になっていたらと考えただけで、涙が止まらなくなります。本当にみんなが無事でよかったです。

しかし、それと同時に悔いのないように生きようと思いました。いつ、どこで、何が起こるか分かりません。もちろん何もないのが一番良いのですが、何かあったとき、まだ言っていないことがある、まだしていないことがあるというのは、本当に悔しいと思います。私の場合は悔しい思いをしなくて済みましたが、今回の地震で被災された方の中には、悔しい思いをした方がたくさんいるのではないでしょうか。

そう考えると、私の家族は運が良い方なのだと思います。実家は全壊してしまいましたが、生きているのですから。確かに住みなれた我が家が無くなってしまったのは、とても衝撃的でしたが、生きていれば建て直すことができます。生きていれば、何度でもやり直すことができますから。

（えじり　るみ・国文学科3年）

全壊した実家（福島県いわき市）

生きること、生かされること
―私の震災体験

■大平栄子

4月21日、今年も大船渡港を見下ろす私の実家の近くの公園に桜が咲いた。それは、被災者の苦しみとは無縁の自然の営みを見せつける残酷な華やかさのようにも思えた。だが、その凛とした美しさは、心が無感覚で凍りついた状態から私を解き放ってくれた。「飛鳥」や「日本丸」も寄港した水深のある自然の良港。その海の底には瓦礫が積もり、いまだに多くの被災者が眠っているとはいえ、桜の向こうに見える海は吸い込まれるほど青かった。海と共に生きてきた三陸沿岸の人々は、海への恐怖と愛着のアンビヴァレントな思いを抱きながら、いま復興へと向けて歩みだしている。

大船渡に車で向かう途中、私は今回の震災に巻き込まれた。地震による落石だらけの道をなんとか通り抜け、ようやく実家にたどり着けそうだと思った矢先、陸前高田のはるか内陸部で津波に遭遇した。そのときには恐怖感はなく、生死が一瞬の差で決まったことを実感したのは、狭隘な雪の山道を永遠とも思えるほどの長い時間かけて迂回し、封鎖されている高速道の入口を強行突破して、母のいる家に戻ってからのことだった。

従弟の一人は、同僚が波に飲み込まれるのを目撃しながら、かろうじて逃げ切った。別の従兄の娘は、二階の階段のところで波に飲み込まれる寸前に警察官に救出された―私の親戚に限っても、このような話は無数にある。

被災者にとって最も辛かったことの一つは、生存に不可欠な水の確保である。同時に、この体験は普段は疎遠であった人々をも結びつけ、コミュニティの絆の重要性を確認させることになった。我が家の断水解除は11日後だったが、隣家の断水は1か月も続いた。最初は、給水車も来ない日が続いたため、「おばあさんは山に水汲みに行ってきまーす！」と言って、急な坂道を登った場所にある川へと出かけた。20リットル入れのタンク2個に目一杯詰める。水がこんなにも重いのかと愕然とした。

給水車が来るとのアナウンスで家を飛び出

し、並んでも給水車が現れず1時間以上も雪の降る中で待たされたこともあった。だが、皆忍耐強く冗談などを言いながら待ち続けていた。アフリカの少女が毎日水汲みに10キロもの道を歩くため、基礎教育も受けられないという話や、かつて乾期にヘドロのような水を飲んでいるインドの子どもたちを見かけたことが、頭を幾度もよぎった。

この震災は自宅避難者と、家族や家を失った被災者との間の格差を痛いほど実感させるものだった。力自慢の私としては、近所のお年寄りの方の水汲みの手伝いくらいはできると思っていたが、それすら遠慮される方が多いことに驚いた。家族を失って避難所で暮らす人たちへの罪悪感から、自宅在住者はぜいたくをいってはいけないという心理がはたらいているようだ。ふだん遠慮のない私ですら、避難所の悲惨な状況を知ると、なにかできることはないかと思ってそこに通う日々が続いた。被災者と犠牲者の子どもたちが、避難所では救援物資の仕分けや老人の介助、掃除の手伝いなどをしていた。

日本がひとつになって復興しようとのメッセージが日本中から届いた。小さな町は世界中のボランティアの人々でにぎやかになった。不思議な光景だった。遺体を求めて、瓦礫のなかを必死に探す家族と支援の人びと。アメリカやイギリスの兵士たちの姿もあった。日本在住のバングラディシュやメキシコ人が炊き出しをしてくれた。

1か月以上経って固定電話が通じ、海外の友人からのお見舞いのメールを読み、心が溶けそうになった。本学の教職員からの支援物資と20リットルのガソリンを携えて、高田研先生もおいでになった。改めて都留文科大学の皆様に感謝申し上げたい。

この原稿を書く機会をいただき、当事者が語るということについて考えさせられた。これまで避難所におられる多くの被災者の方がTVの取材に応じて体験を語られ、その忍耐強い姿勢は内外のメディアで賞賛された。だが、それは本当に当事者の語りになっているのだろうか。ある語りを期待する、なんらかの「枠組み」が存在してはいないのか。だが、それを気にしていては前に一歩も進めない。他者の語りから自由になるためには、せめて各人が「適切に想像＝語る」（アミタヴ・ゴーシュ『シャドウ・ラインズ』）することに努めなければならない―文章を書き進めながら、そんなことを思った。

（おおひら　えいこ・本学英文学科教員）

学生たちによる災害ボランティア活動の経過報告

■高田　研

2011年3月11日以後、本校の学生たちは被災地に向けてさまざまなボランティア活動を個々に、また組織的に展開してまいりました。宮城県で演奏活動を行なった学生や、大船渡市で被災した図書館のデータ整理をして岩手県版の新聞に載った学生。個人での「RQ・市民災害救援センター」や銀河ネットを通じての活動参加など、さまざまな動きがありました。しかしながら現在、個々の活動の全てを掌握できておりません。

ここで紹介する活動は、学生たちが自主的にサークルを組織し、活動してまいりました「バーサス」です。彼らの半年間の軌跡を、大学ホームページ上の環境コミュニティ創造専攻ブログに彼らから投稿されました内容を元に整理したものです。

これまでの半年の活動を3期に分けて整理してみます。第Ⅰ期はボランティア経験のなかった学生たちが、NPO法人都留環境フォーラムのメンバーを中心に、動き出した支援物資の仕分に参加した3月16日から物資を2便で釜石―南三陸に届けた3月末まで。第Ⅱ期は6月に同NPOが主催し、学生と釜石に入るまで。第Ⅲ期は7月から9月までの自律的な展開期です。

第Ⅰ期　メディアの情報によって学生が動き始める

―支援物資の仕分け作業

3月12日、震災翌日。テレビとインターネットによって、平穏な生活の中に突然届けられた津波の映像は私たちの理解を越えたものでした。しかし自然学校の面々が3月13日に現地入りすることで、リアルな情報がネット上に入るようになり、次第に現地の状況が解って来ます。

学生ボランティアの現地受け入れ先である、広瀬敏通氏（日本エコツーリズムセンター）、佐々木豊志氏（くりこま自然学校代表）は仙台から宮城南三陸町に入り、北海道の高木晴光氏（NPO法人ねおす代表）は釜石へ入り、支援の拠点を求めます。

彼らの動きにあわせて、全国の自然学校系組織はそれぞれにその支援を開始します。我々NPO法人都留環境フォーラム（加藤大吾代表）でも、その支援先を釜石に定め、ネットワークで支援物資と支援金を集め始めました。正確には、大きなリスクを伴う支援であるために、初期はあくまでも個人の責任で名前を持たない支援隊を始めました。

表1　ボランティアバスによる活動

	出発日	帰着日	日数	本学学生	卒業生教員他	活動先	主な助成金等	主催団体	受け入れ／連携団体
0回	6月3日	6月7日	5	41	7	釜石／大槌(岩手)	日本財団	都留環境フォーラム	ねおす／遠野まごころネット／銀河ネット
1回	7月1日	7月3日	3	25		登米(宮城)	日本財団	V.S(バーサス)	RQ東北本部
2回	7月15日	7月17日	3	23		登米(宮城)	日本財団	V.S(バーサス)	RQ東北本部
3回	8月7日	8月12日	6	9		釜石／大槌(岩手)	日本財団	V.S(バーサス)	ねおす／遠野まごころネット
4回	8月21日	8月26日	6	8		登米(宮城)	日本財団	V.S(バーサス)	RQ東北本部
5回	9月8日	9月15日	8	12		釜石／大槌(岩手)	ソロプチミスト／本学後援会	V.S(バーサス)	ねおす
計			31	118	7				

3月18日から大学駐車場をご好意でお借りして、全国から宅急便で次々に届けられる物資の荷受けを始めました。仕分け作業が開始されます。朝9時ごろから始まり、日没ごろまで、沢山の学生が口づてで集まり、荷物の分類作業が始まりました。

3月20日、駐車場では、40人余の学生ボランティアが黙々と働いています。この大所帯を効率よく動かすため、工程表が壁に張り出され、救援物資の分担を責任もって仕分ける「仕分け隊長」が出現しました。

3月22日、連日参加している比較文化4年の川崎倫さんは、地震の影響で卒業式がなくなったので、学科で執り行われた証書授与に参加せず、終日ボランティアの仕事をしていました。そこで、スタッフの発案で仕事終了後に、資材置き場で一人だけの卒業証書授与式を行いました。彼女は卒業後NPOのスタッフに就職して活躍しております。残念ながら数をカウントしていなかったのですが、学生をはじめ、休日には東京方面からも社会人が集まり、のべ300人を越える人々がこの作業に携わったことは確かです。

3月23日～28日、2回に分けて被災地に向けて救援物資を出荷いたしました。一回目は大船渡、釜石、大槌の避難所に、2回目は宮城、南三陸町から北へと避難所を巡りました。ここでボランティア活動は一つの区切りを迎えます。

◇

第Ⅱ期　現地での体験が学生の組織化を進めた
―VSバーサスの立ち上げ

4月14日、日本エコツーリズムセンター代表、既に宮城県登米市の鱒淵小学校体育館にボランティアセンターを陣取り、震災ボランティアRQの実質的な中心人物である広瀬敏通さんによる特別講義が始まりました。広瀬さんには、超過密な現地でのボランティア活動を指揮する合間に、本校のために講義に来ていただくという綱渡りをしていただきました。当時はNGOによるボランティア組織としては最大規模のボランティアセンターとなり、多い日には100名を越えるボランティアが体育館で寝泊まりし、さまざまに活動をしておりました。その現場のリアルな話が学生に直接入って来始めたわけです。

「自分の中にあった＜ボランティア＝無償で行う人＞という意識が変わりました。ボランティアとは自分の意志で行なうもので、受け身ではなく、自主的・主体的な要素が強いのです。…中略…本日の先生のお話を受けてボランティアに限らずさまざまな『志』をもった学生がいると思います。私もその学生の一人です。」

（受講学生の感想から）

4月30日、連休に入ると学生たちはそれぞれにボランティアに入ります。各自が登録して参加しているので実数は掴めませんが、連休前後にRQだけで10名余が参加しているようです。

学内にボランティアサークル「VS（バーサス）をつくった比較文化学科の藤谷君はRQへ行った一人でした。もう一人の代表、社会学科の大久保君も、大船渡に住んでいる祖父母が避難している小学校を訪ねて連休にボランティアをしています。

「大船渡は道路に瓦礫がないだけで、まだまだ全然片付いていません。テレビで見るのとは迫力が全く違い、まるで映画の中に入ったかのような感じになります。避難所はまずゆっくり生活するには全然落ち着かない場所ですごいストレスが溜まりました…略…。」

（現地からのメール・大久保君）

この2人が核になって、駐車場でボランティアをして来た学生たちも入り、組織的な動きを始めるのが連休後です。日本全体の震災救援ムードが連休を境に急速に冷え込んで行ったのに対して、現地を見た学生たちは、何とかしなければならないという意志を固めていったようです。

活動には資金が必要です。資金を確保するために彼らは箱を抱えて募金を始めるのですが、校内では失礼だと叱咤され、市内を回ってはもう既に出したと断られ、最初から活動は暗礁に乗り上げていました。世の中を甘く見ていたわけですが、それは学生にとっていい経験となりました。

その後、表1にありますように日本財団やソロプチミストの会、そして大学後援会からも支援をいただくことが出来、活動はなんとかこれまで継続しておりますが、当初はゼロからの出発でした。

5月13日NPO都留環境フォーラムが主催し、釜石へ向けて、本校学生のボランティアバスを出すことが決まり、校内でオリエンテーションを開きま

した。その後、6月3日に釜石に出発し、帰校後、報告会を終えるまで、このプロジェクトには41名の学生が、瓦礫撤去から、子ども遊び支援、そして青空カフェと呼ぶ避難所周辺でのカフェの企画を準備し、現地で実施いたしました。

この動きと並行して学生の災害ボランティア組織が出来てまいります。

5月25日に学生によるボランティア活動の自主報告会が開かれました。東北県人会からの現地の報告、次に、実際にRQでボランティアに参加した学生の報告があり、仕事内容の説明やボランティアに参加しての「思い」を聞きました。「一歩を踏み出してボランティアに参加してほしい」という全員の言葉に熱い思いを感じたと報告にはあります。

5月30日 都留文の災害ボランティアチーム「VS（バーサス）」が正式に結成されました。バーサスのブログもできました。このバーサスは大学の登録サークルとして正式に活動を始めます。

活動項目

1 文大から現地への無料シャトルバスの運行

2 必要な装備の貸し出し

3 大学への協力の呼びかけ

今後のチームの発展次第で、独自のプロジェクトを企画する。

◇

第Ⅲ期 VS（バーサス）の活動の始動

―5回のボランティアバス運行

7月1日 25名宮城RQへ1陣が出発します。
7月15日 23名宮城RQへ2陣が出発します。

参加者の感想から

「今日は小泉地区で斜面に残っている瓦礫を下に落とす作業をしました。瓦礫と言えどもかつては生活の一部として存在していたもの。泥にまみれた写真や年賀状やノートなどを見つける度に心が痛みました。途方にくれるような作業でしたが、みんなが少しずつでも力を合わせることで復興出来ると感じた一日でした。」（環コミ1年）

「つぶれたように見えたガソリンスタンドが、実は屋根もない中で元気に営業していたと知り、『30年ぶりに焼けたよ』と笑う真っ黒なお店の人に被災地の底力を見た…」（国文3年）

「被災者の人を第一に考えることの難しさ、自分のいる体育館（ボランティアセンター）と避難所との見えない壁があると感じた。接することのむずかしさ。また来たい。」（比文1年Y）

「気丈にふるまう被災者の方に、逆に自分が励まされた。人間は強い生きものなんだなと感じた。…ボランティアで自分は成長できたし、もっとしっかりしていきたい。」（比文1年H君）

これまで説明会から参加者の学習会（リスクマネージメント）、帰ってからの振り返りと報告会など緻密な計画のもとに進めて来ました。現地でのボランティアではなく、コーディネートするということは本当に大変な仕事です。コーディネートするためには現地の状況を常に熟知し、先々で起こりうることを予想し、先に手を打って行く能力が必要です。大久保君が一昨日研究室に現れて、「先生本当に大変です。」と本音を吐きました。しかし弱音を言えるからこそ彼は続けられるのだろうと私は見守っておりました。周囲の学生たちは口を揃えて「大久保祐真は変わった（成長した）」と言います。

8月6日 釜石、8月21日 宮城、9月9日 釜石と3回のボランティアバスを彼らは運行しました。

この9月のボランティアは、6月に釜石―大槌の小中学生と出会って一緒に遊び、別れ際に赤浜小学校の副教頭先生がおっしゃった「この子たちはボランティアで訪れる学生と別れてばかりいる」という言葉を忘れずに、子どもたちとの再会を実現したという経緯があります。

「子どもの印象は6月に比べて、落ち着きがあり、程よく楽しく遊んでいた。仮設が敷地内に建っている安渡小の近くを通り過ぎる時、自分たちの学校のことを紹介してくれた。赤浜小の子どもはほとんどがリピーターだった。副校長先生のおかげです。」

現在大槌町の安渡、赤浜小学校は8月まで3校同居した吉里吉里小学校を出て、吉里吉里小学校以外の学校は全て、運動公園に建てられた一カ所のプレハブの校舎に集められて学んでいます。職員室は、

未だに2校で1室を使用しており、ここから先2年間はこの同居状態での教育が行なわれることになる見込みだそうです。

また漁業が再会され始めた根浜海岸において、草刈りや漁具の移動作業を行ない、作業の合間に漁師兼民宿をやっておられた前川さんや元宝来館職員の伊藤さんに話を聞いています。

「伊藤さんからは、避難経路がより人々に身近なものになるよう散歩コースにし、高台の開けた場所でコーヒーなど飲めるようにしたいと想いを語ってくださいました。復興というと、固いイメージがありましたが、人々が楽しみながら復興するかたちもあるんだと知って新鮮でした。」

「避難経路も途中まで歩かせていただきました。前川さんには、津波が起きた当日の話を聞かせいただきました。林の中で流れついたノコギリを使いながら、焚き火で暖をとったと言います。津波で営んでいた民宿や漁師機材は流されたそうですが、前川さんはまた漁を再開するために今準備を進めています。こちらが元気をもらった1日でした。」

（社学3年）

「青空喫茶は田郷地区仮設住宅の談話室をお借りして行ないました。そこでは、地域の方々と麦茶や梅こぶ茶を飲みつつゆっくりとお話をしました。都留から持って来た『バンカム』＊のコーヒーが、来て下さった方に大変好評で喜んでいただけて本当に嬉しかったです。お話の中で聞いた地元の方々の復興に向けての願いや決意にこちらの方が奮い立たせられ、とても胸が熱くなりました。青空喫茶のような地元の方々との密な交流の場を今後も継続して設けていき、日々刻々と変わる被災地の声を聞きそれに応えていきながら復興への道に繋げていきたいと今回の活動を通して強く感じました。」

（国文2年）

※大学前の喫茶店でコーヒーは寄贈いただいています。

釜石の漁業はやっと動き始め、個人でこれまで取り組んできたワカメ養殖の種付けが終わり、現在はアンカーにする土嚢に砂利を詰める作業をボランティアと共に進めています、また漁協では定置網も再開されて、出荷も始まり、新鮮な魚もやっと口に出来るようになってきました。観光業も伊藤さんたち若手で起業資金の補助金を手に入れて、新たにエコツーリズムやグリーンツーリズムでの起業を考えています。また拠点構築の企画も舞い込んでまいりました。

また水田が全て流された片岸海岸では、これまで30年間進まなかった企業の誘致が実現し、そこで150人ほどの雇用が見込まれる見通しが出来て参りました。

現地からは受け身から、少しではありますが、前向きの明るい話題が聞こえ始めました。

しかし一方において、仮設住宅での高齢者の引きこもりなど、新たな問題も指摘され、福祉面での公的ケアと日常の間にある、予防的な措置としてのコミュニケーションを開いていくボランティアも必要とされています。岩手県立大学を中心とする銀河ネットが9月中旬まで開いていたカフェも終わり、全体的に9月中旬以後はボランティアもめっきり減少しています。現地に拠点を置くねおすでは、現地スタッフの柏崎さんを中心に、地域全体の福祉を射程にいれ、岩手のグリーンツーリズムとしては有名であった橋野地域の人的資産と提携しながらの新たな起業を考えています。

バーサスもこの9月のボランティアで一旦活動が途切れています。一巡して現地の子どもたちとの約束を果たしたという安堵感もあるのでしょう。しかしまた11月、12月に釜石に行くという計画も聞こえて来ます。ここから活動は第Ⅳ期にはいるのであろうと予想しています。

阪神淡路大震災では、そのときに立ち上がった関西学院の「ブレインヒューマニティ」、京都の「学生ボランティア協会」の学生たちはその後ＮＰＯを設立し、現在では社会的に起業させており、優秀な人材を多数この市民活動の領域に排出いたしました。

震災は途方もない負の経験ですが、そこから這い上がる力は、次の世代に託して行かねばなりません。教員になる学生を育てる立場からも、学生がこの負の現実に向き合って考えることの重要性について再認識する次第です。

活動には資金が必要です。
下記口座に今後ともご支援をお願いします
山梨県民信用組合　都留文科大学前支店
105　3396128
都留文科大学災害ボランティアサークルＶＳ

（たかだ　けん・本学社会学科環境・コミュニティ創造専攻教員）

釜石での学生たちによるボランティア経験より

ここでは、高田研氏の報告、第二期に実施された「都留こどもあそび / 地域支援隊」（NPO法人都留環境フォーラム主催、日本財団助成事業）に参加した学生たちの感想を、同隊報告書から抜粋しつつ、紹介していくこととします（学生の感想は6月時点のものです）。「こどもあそび / 地域支援隊」は、学生（都留文科大学、同大卒業生、大月短期大学）44名、市民、教員、NPOスタッフ5名の計49名によって構成。6月4日～6月6日にかけて現地で活動をおこないました。現地入りに先立って、筒井潤子先生から「子ども理解について、また高田研先生から「リスクマネジメント」についてのレクチャーを受け、事前学習を行ないました。学生たちは、「こども隊」「青空喫茶隊」「そうじ隊」「聞き取り隊」「調理スタッフ」に分かれての活動です。

（田中夏子）

こども隊の学生たちは6月4日早朝、釜石に到着後、赤浜小学校および安渡小学校の児童18名とともに活動開始。波に追われて裏山に駆け上がった子どもたちです。厳しい体験を経て、表情の硬い子、泣き出しそうな子に学生たちが寄り添います。筒井先生の事前レクチャーがあったことで、学生たちも落ち着いて対応できたと言います。

「震災が起きてからずっと何かしたい！」と思っていました。現地に行ってまず思ったこと…「震災3カ月も経ったのにまだこんな悲惨な状況なんだ」。今なお、避難所で暮らしている人々や瓦礫の山を見て、「ここおらんちだ」と話してくれた小学校3年の男の子の言葉がすごく心に突き刺さっています。でも、みんな精一杯生きていて「幸せ」「嬉しい」「ありがとう」という言葉も多く聞きました。今後も継続的に支援したいと思います。（専攻科 横森 隆）

◇

青空喫茶隊の学生たちは、4日朝、赤浜2丁目の集会所で開催。テントを設置し、お茶菓子やフリーマーケット用の物資を持ちこみ、素朴な材料ながらリラックスできる看板を掲げてお客さんを待ちました。来てくださるかという心配をよそに、大忙しとなり、地元からはホシイモの差し入れもいただいて地震のこと、子育てのこと等話ながら、地元のみなさんの交流の場としても賑わいました。

三日間青空喫茶の活動に参加しました。同じ青空喫茶でも、その場所ごとにニーズや問題点、喫茶開催の意義が違ったように思います。この活動をスタートに、またボランティアに行きたいと思っています。

（社会学科 湧坂知晶）

人見知りなのでとても緊張しましたが皆さんとても優しくて、たくさんお話することができました。「みなさんとこうやっておしゃべりできることがうれしい」と言っていただき、青空喫茶もとても重要な役割があるのだと思いました。

（社会学科 環境・コミュニティ創造専攻 3年 小黒明奈）

そうじ隊では、三日間にわたり、釜石市中心地にある青葉ビルの清掃活動、海岸地域等の集落跡での瓦礫撤去を行ないました。青葉ビルは倒壊は逃れたものの、津波や汚泥が天井まで達しており、大変な作業でした。清掃翌日、このビルで「復興食堂」というイベントが行なわれ、食堂、コンサート、フリーマーケットが活況呈しました。前日の清掃があったからこそ、イベントが気持ちよく開催できたと知り、学生たちはほっとした様子でした。

本当にニュースで見た光景と一緒でした。私たちの隊は、作業中に現地の方と関わる機会が少なかったのですが、例えば初日、私たちがビルの清掃を頑張ったことで、次の日のイベントを行なうことができたと聞いたときは、とてもうれしかったです。大変疲れた三日間でしたが有意義でした。

瓦礫処理にあたっては、連日、作業前夜にリスクマネジメントの講義が丁寧に行なわれた上で、注意深い作業が行なわれました。作業にあたっては、北海道から来られたボランティアの吉崎文浩さんにお世話になりました。フル装備での作業はたくさん汗をかくので水分補給は必須。今回の津波では数えきれないほどの車が流されました。しかし、車一台撤去するだけでもこんな風に手続きが必要なこと知り、改めて大変さを感じました。

（そうじ隊 参加学生）

◇

この他の活動としては、震災当時の状況を地元の方々からお聞きして、それを記録として残す聞き取り隊があります。聞き取り隊には、岩手内陸部で地方銀

行に勤める卒業生、北海道の大学院に進学した卒業生も加わりました。災害当時の経験を記録に留めることは、経験を語る側にとって、精神的に大きな負担となるため、今回は、ＮＰＯ法人「ねおす」と既に信頼関係が形成されている皆さん（海岸地域の自治会長、漁協関係者、水産加工事業経営者、消防団関係者、旅館経営者、復興食堂主催者他）にお話をうかがいました。

このボランティアに参加して一番感じたのは「聞き取り」と簡単に言っても、話を聞く側は細心の注意が必要であるということでした。私は、質問を投げ掛けることはあまりなかったのですが、同行した田中夏子先生もとても慎重にインタビューしているようでした。思い出したくもない命に関わる経験を言葉にするということは私には想像できませんが、ボランティア先の方の、「インタヴューによって被災者の方が深く傷ついて、何かあったらどうするのか」といった内容の言葉が忘れられません。ボランティアとは、善意だけで動くだけではいけない、被災地の状況、被災者の気持ちに十分慎重に向き合わなければならないし、事前の学習が必要であると考えます。

（社会学科環境・コミュニティ創造専攻４年　遠藤淑）

◇

ボランティアの中には、東北出身の学生も多く加わっていました。宮城出身の阿部寿隆くんもその一人です。

子どもたちや地域の方々から逆に力をいただいた。そう感じたのは、被災地の方々に、あたたかく受け入れてもらい、親身に接していただいたからであると同時に、震災当日からまだ3カ月も満たないが、少しずつ現実を受け入れ、前に進んでいる力強い様子が痛いほど伝わったからであると思う。活動では、子どもたちが全身で思いっきりはじゃいでくれたことが嬉しかった。でもその笑顔の裏にはどれだけ心のキズがあるだろう。自分たちのふとした一言でキズつけるかもしれないという怖さと、子どもたちが今、何を求めているのか、それを理解したいという思いが、常に葛藤としてあった。「明日も遊びたい」という言葉や「友だち」という言葉を耳にして、少しでも元気になってもらえたんだ、という実感ともなった。

（社会学科環境・コミュニティ創造専攻３年　阿部寿隆）

◇

こうした多岐にわたる活動を後方で支えたのが3名の調理スタッフでした。50人以上の食事を早朝から深夜まで、調理場に張り付いて作り続け、昼食時は、各現場に分刻みのスケジュールで配達。市民として参加くださった奈良竜一さん（大月自動車学校職員）は、プロの調理者として経験も豊富です。奈良さんのリーダーシップのもと、二人の学生が奮闘。最後の日の夜行バスでの夜食まで用意するなど、行きとどいた配慮で学生たちの健康を支えました。

◇

この活動には、現地の方々からも多大な支援をいただきました。活動のコーディネートをはじめ、滞在先や地元住民の方々との連絡を一手に引き受けていただいたＮＰＯ法人「ねおす」、そして二日分の夕食を作っていただいた橋野地区の女性のみなさん（藤原政子さん、佐々木かよ子さん、小笠原静子さん）はじめ、「遠野まごころネット」「岩手県立大学学生ボランティアネットワーク Ginga-net」、食材や資材を提供いただいた岩手畜産株式会社、都留市役所、東桂保育園のみなさんに感謝申し上げます。

（構成・たなか　なつこ・本学社会学科環境・コミュニティ創造専攻教員）

そうじ隊が入った翌日の青葉プラザイベント

東北県人会を代表する学生から、アルバム贈呈

＜ボランティアする側の心＞を気遣う

■川崎　倫

私は今回のボランティア活動で事務・会計関係と、「こどもあそび隊」のリーダーとして学生の活動をサポートさせてもらった。活動を通じて最も感じたことは、「ボランティアする側の心」の重要性だった。

活動中、一緒に遊ぶ子どもたちの口から突然、自分の家族が津波で流されたといった当時の話が出たとき、どう対応したらいいのか分からず困惑したり、また津波の話をされるのではないかという不安感と不自然な子どもとの距離感、雰囲気などが、学生のなかに生まれていた。

毎晩「振り返りの時間」を設け、自身の中では処理しきれない複雑な感情を吐き出してもらった。しかし、その時間内でもまだ整理がつかない学生も多く、私はその後個人的に話を聞く時間を設けたり、「こどもあそび隊」のメンバーで残ってもう少しお互いの気持ちを吐き出し、共有しあう時間をつくった。

また、学生たちの「自分は何かをしてあげる側」で相手は「受け取る側」だという意識が学生たちの今の心の状態をつくっているのではないかと思い、「被災したこどもたちと遊ぶ」という感覚から「元気なこどもたちとただ思い切り遊び、自分が一番楽しもう」と話した。翌日には彼らは「被災した子ども」というよりも「普通の子ども」のような感覚で関わっているように私には見え、一安心した。

3月11日の震災以降、多くの学生がボランティアとして現地に向かっている。彼らの想いや感情も外に出す機会をつくることがとても大切だと感じた。

（かわさき　みち・本学比較文化学科卒業生、地域づくり協力隊）

こどもあそび隊の活動の様子

◆公開講座
「被災者にとっての心のケアについて考える」
～山梨県「心のケアチーム」の一員として
被災地に入って感じたこと～

都留児童相談所所長　近藤直司先生
2011年5月27日
主催：都留文科大学地域校流研究センター地域
教育相談室

「被災者にとっての心のケアを考える」に参加して

■分部勝規

3月11日に発生した東日本大震災より2ヶ月以上（※公開講座開催時における経過日数）が過ぎた。地震当日中学校にて勤務していた私は、これまでにない揺れに驚きながらも、学校にいた1、2年生を無事に避難させるために緊迫した状況であったことを覚えている。しかし、時が経つにつれ、日常生活を取り戻してきている私たちのなかでは、地震があったことが少しずつ意識から薄れてきていると感じている。

報道を通して伝わってくるのは、前向きに復旧・復興に取り組もうとする意識を高めるためかもしれないが、人々の助け合いや思いやり、頑張っている様子といったものが多いように思われる。そんなところから、大きな被害があった地域も少しずつ良くなってきており、復旧が進んでいるといった良い想像が働き、意識を薄れさせているのかもしれない。

そんなとき、都留文科大学地域交流研究センター主催の公開講座で被災地に入って支援活動を行なってきた近藤直司先生＊のお話が聞けるということを知り、実際に被災地ではどんな様子なのかを知りたいと思い参加した。

話の内容は、これまでの報道からは予想したことのないものだった。ショックだったのは、自然被害がもたらすダメージよりも、その後の人々の間で生まれる冷たさや妬み、被差別感から来るダメージの方が大きく影響しているということ。その中で、津波によって家族を失い、家や土地、仕事までも失ってしまった人の失望感は、想像する以上に大きいということを感じた。胸が詰まるくらいにショックであった。

と同時に復興を目指すにはどうすればよいのかと強く思った。近藤先生からの「自分ができる少しのことを惜しまない」というお話や周囲との意見交換から、どんな形でもよいから関心を持ち続けることが大切であることを感じた。

まだまだ復興にはほど遠いなかでがんばっている方たちに思いを寄せ、一日も早く日常生活を取り戻すことを祈っております。

（わけべ　かつのり・富士吉田市教育研修所）
＊本号巻頭文（4～5頁）執筆者

被災した教師の語りから、「日常」を問い直す

■筒井潤子

9月。瓦礫の取り除かれた3月までの小さな港町は、緑の草に覆われ、コスモスが揺れている。海はどこまでも青く美しい。自然さえも、早く「あの日」をなかったことにしようとしているかのように…。でも車窓からふと目に入る、白い小さな箱の集合体は、人々の心が閉じ込められているかのように痛々しい。

◇

4月、仙台で幾人かの教師のお話しをお聞きした。日常的に子どもに向き合いながら自らの感性を育んでいる教師は、カウンセラー云々言わなくても、すでに子どもたちの心のケアを自然と行なっていた。

校庭に避難してくる住民の車の列とテレビの情報から、「校庭に集合して高台に避難」というマニュアルを瞬時の判断で変更し、「子どもは全員4階に上がれ！住民は3階に！」と指示した教師集団。避難後、間もなく2階まで水没。

押し寄せてくる津波の音を聞きつつ、「1年生から順番に屋上に上がれ。上がったら屋上の真ん中に固まれ。その周りを2年生が、その周りを3年生が取り囲んで寒くないようにみんなで固まれ！」津波を見せないという瞬時の判断で、命と心の安全を守った教師。

避難所で、まだ親の迎えのない子どもたちと過ごす中で、先生が日課を決めて、朝礼・掃除当番をやり、外に出て思いっきり走り回った。夜は、みんなでストーブを囲んでお話し会をした。

震災後間もなく、担任をしていた子どもからもらった手紙を見せていただいた。

「避難する時、先生は、近くにいたおばあさんの心配をして、頭にはようしゃなく雪が降りかかり、それにもかかわらず、時々声をかけて歩く先生を見て、私は、＜先生みたいな大人になれたらいいなあ＞と思いました。それからの先生もテキパキ動いて、門小生を落ち着かせているのを見て、＜カッコイイなあ＞と思いました。『バキバキ！ゴオー！』というものすごい音も聞こえてきて、＜この世の終わりだ＞と思いました。すると教頭先生が、＜もっと上に上がれ！＞と門小生に呼びかけて、門小生はもっと上に避難しました。それが正しい判断でした。なぜなら、下級生が津波をほとんど見ていないんです。それは、正しい判断でした。」

この子は、死の恐怖に襲われたにちがいない地震を体験し、津波から逃げ、生まれ育った場が根こそぎ奪われた現実を目のあたりにした。人は危機的な状況に置かれたとき、しばしばその危機を切り抜けながらも、そのときの記憶を失う。しかしこの子はその状況、怖さをしっかり認識し再現している。そしてそこでともに動いてくれていた大人（先生）の姿、その動きをしっかりと見、その動きの意味と的確さを読み取っている。気が狂うほどの恐怖におびえながらも、この子は先生を信じ、大人を信じ、人間を信じ、その姿を追うことで安心感を得ていたに違いない。それは、危機の起こったその時に急に生じたというようなものであるはずもなく、これまでの日常の学校・地域の生活のなかで培われてきていた関係性がもたらしたものだ。そういう関係性の蓄積がこの心を壊すような危機場面で、安心感とともに、ある種の冷静さと観察力を発揮させ、この手紙が生まれたのではないか。危機場面で瞬時の判断をもたらす教師の感性とともに、その感性のなかで育まれることによって生まれる子どもの感性と心のたくましさ。

◇

しかし、現実の学校現場に目を転じれば、チェックリスト、＊＊テストなどというマニュアル化されたものによる「子ども理解」。「簡単で便利なもの」の氾濫。平時には軽視されるこういったことが、危

機の時に、大きな差を生み出すのだろう。この震災を経てなお、「短時間で簡単に子どもがわかる」などという方法にしがみつこうとする援助者がいるならば、それは、この震災にたいし涼しい顔で高みの見物をしていると言い切るしかない。人間理解、関係の構築は、ともに揺れながら苦悩し、長い道のりのなかからわずかの光を見出そうとする共同作業の中から生まれてくる。子どもたちは、葛藤し、悩みながら自分や他者とぶつかりあい、言葉を見つけ、自分を見つけていく。揺れのなかにいる子どもたちは、その揺れが「成長のために大切なものであること」として周りの大人から見守られるなかで、そこに居続けることに耐えることができる。

◇

今回の震災は、私に日常の「臨床」の問い直しを厳しく突きつけてきた。人が生きるということの意味を問いただされている。

（つつい　じゅんこ・本学初等教育学科教員）

仙台市山元町立山下第２小学校。おしゃれな校舎。子どもたちの自慢の学校だったことだろう。

仙台市亘理荒浜小学校。瓦礫の散在する教室に先生の思いが込められている。

2011年7月30日地域社会学会・社会学科共催
綿井健陽氏講演会の報告

危機的状況下におけるメディア

■佐々木大祐

7月30日、地域社会学会・社会学科共催で映像ジャーナリスト綿井健陽さんによる「福島第一原発事故とメディア報道」を演題とした講演会が開催されました。講演者の綿井さんは、3・11以降、福島の事故現場をビデオカメラ片手に取材を続け積極的にその実態を発信しつづけている方です。

最初に都留市の放射線量が0.2μSv（マイクロシーベルト・放射線量の単位）前後という測定数値を報告されました。これは通常の範囲を大きく超えており東日本はすでに広範囲で放射能汚染されていることを意味します。しかし、そういった事実は表立って報道されていません。

前述のような明らかな情報隠蔽や偏向的な報道によりメディアへの不信感は日増しに高まっています。今の状況を綿井さんは既存メディアが大きな権力の下に都合よく作られたものという真実が露呈してきたと指摘されました。いわゆる原発の「安全神話」も、こうした背景のもとに作られたのでしょう。しかし、未だに私たちはこうしたメディアの情報をあまり深く考えることもなく漫然と鵜呑みにしているのが現状です。

では、私たちはどうすればよいでしょうか。綿井さんは情報を受け取る側がリテラシーを持つことに加え、私たち自身が「メディア」となる必要性を提起されました。危機的状況の中、真実や自らの思いを広く伝えることが今最も求められています。現在、私たちの周りにはTwitterやブログ、電子掲示板などのように容易に意見を発信できるツールが数多く存在します。だからこそバイアスのかかっていない私たちが一分一秒でも早く情報を発信することが重要になるのです。加えて綿井さんが強調されたように正確な情報を伝えるということはとても難しく責任を伴うものであることも留めておかなくてはいけません。

講演会後のトークセッションは事前学習会実施の効果もあり、活発な意見交流がつづく白熱したものとなりました。今回の講演会を期に私たち一人一人がメディアとの関係を改めて考え、それを問いなおしていくことが求められるのではないでしょうか。

（ささき　だいすけ・社会学科現代社会専攻3年）

東日本大震災に関して社会学科から教授会に提案がなされました。その文章を資料として掲載します。

教授会のみなさまへ

2011年6月8日
社会学科 学科会議

東日本大震災をうけての本学での取り組みに関する提案

みなさまの日ごろのご活動に敬意を表します。

さて、本年3月11日に起きた東日本大震災および津波による東北・北関東一帯への被害、そして福島原発の過酷事故は、私たちにさまざまな形での課題を突きつけていると考えます。社会学科の学科会議ではこの課題について議論し、本学として取り組むことができると思われる以下の四点について、学内にご提案することとしました。

みなさまにご検討いただけますと、誠に幸いです。よろしくお願いいたします。

1　大学付属図書館において、震災・津波・原発問題等についての学生・教員・市民が考えるための資料コーナー（単行本やジャーナルなど、被災者支援のボランティア活動をしている学生たちの写真などもあわせて展示するなど）を設けることができないでしょうか（1年くらいの期間）。付属図書館運営委員会にてご検討いただけますと幸いです。

2　5月11日教授会においても種々議論がありましたが、大学としての防災計画を、大規模地震を想定したものに見直し・改定するべきと考えます。あわせて新防災計画を学生・教員（非常勤の先生方を含む）に周知徹底し、授業中に避難訓練を実施するなどが必要と考えます。またいわゆる「帰宅難民」となった学生・教員その他むけの宿泊施設の充実・確保も議題に含まれると考えます。以上につき、教授会にて議論を深めていただけますと幸いです。

3　本学学生による災害支援活動については、4月の地域社会学会の緊急集会「東日本大震災を考える・第1回」において参加者から多くの意見が出ました。本学科の学生でもボランティア休学を申し出ている者もいます。5月に入って本学東北県人会の学生たちなどによる多彩な災害支援活動が開始され、6月には災害支援ボランティア活動に関心がある学生むけの自主的な情報提供・支援窓口（「都留文科大学ボランティアセンター」）が立ち上げられたことに、敬意を表します。他方で、履修との関係や、ボランティア活動に伴う諸問題（経費、事故、病気など）も考慮しなければなりません。上智大学や大阪市立大学、早稲田大学などのボランティア・センターのとりくみ（学生が災害ボランティア活動をする際の各種のルールや災害ボランティア登録制度などを含む）も参考にしながら、本学においても、大学としての災害支援ボランティア活動へのとりくみついて、学生委員会などにおいて、議題として取り上げて検討していただけますと幸いです。

4　原発の過酷事故は本学としてのエネルギー・シフト政策の必要性という課題を提起しています。大局的には、原子力発電に依存せず自然再生エネルギー中心のエネルギー構造を本学としてもめざしてはどうでしょうか。

(1)耐乏というよりも電力の倫理的消費という発想に基づいて、大学の電力使用のルールや慣習、教室等の施設・備品を「節電所」型に改めるためのさまざまな知恵を出し合えないでしょうか。

(2)長期的には小規模水力や太陽光、バイオマスなどによる自家発電・蓄電施設の設置などを検討する必要があると考えます（これを大学の特色づくりや都留市のまちづくりと連携させる発想もありえましょう）（植田和弘「経済教室：エネルギー政策再構築2」、『日本経済新聞』2011年5月19日、参照）。

以上につき、教授会にて議論を深めていただけますと幸いです。

以上

福島県からの自主避難者による講演

■泉　桂子

環境・コミュニティ創造専攻では2年生前期に「環境・コミュニティ創造演習」という授業があります。例年、環境・コミュニティ問題の書籍を読み、それについて討論を行なってきました。今年は昨年に引き続き高木仁三郎著『市民科学者として生きる』をテキストとして取りあげました。

3月に東京電力福島第一原子力発電所の事故があり、学生諸氏のこの問題に対する関心も高まっていました。そんなとき担当教員である泉は、山梨県立文学館（甲府市）で行なわれた映画「ミツバチの羽音と地球の回転」上映会に参加しました。そこで福島県からご家族で都留市に避難された方がいることを知ったのです。映画に先だって行なわれた小林英子さんのアピールは静かに私の胸を打ちました。小林さんのように美しいふるさと・家族との大事な場所を一瞬にして追われた方達が何十万人いるに違いありません。「是非この方のお話を学生さんに聞いてほしい」と思い、小林さんにお電話を差し上げたところ、こころよく講演を引き受けていただきました。

以下講演の要旨と感想をまとめましたので、一部を抜粋し、紹介します。なお感想はどれも甲乙付けがたいものでしたが、紙幅の関係上代表者のみの掲載といたします。

（いずみ　けいこ・本学社会学科
環境・コミュニティ創造専攻教員）

小林さんのお話しのまとめ

菰田翔子

小林さんの住んでいた福島県いわき市は、原発から30キロ以上離れた場所にある。避難勧告は出されなかったものの、土壌、空間、海水などの放射能汚染により、人々の安全は脅かされた。

地震が発生してからの約1週間、いわき市では停電、断水が起きたことに伴い、情報の遅れが生じた。そのため市民は状況が把握できず、避難することもできなかった。しかし小林さん一家は、このときすでに旦那さんの実家がある山梨県都留市に避難していた。小林さんに迷いはなかった。

もちろん、今でも福島県いわき市で普通に生活している人々はたくさんいる。小林さんのご近所の方でも、いつ帰って来るのかと心配してくださる方もいるそうだ。小林さんは、避難したことによって無くしたものはたくさんあるとおっしゃっていた。家や人付き合い、当たり前にあった生活、また、お子さんたちが通っていた小学校やそこでの友達。しかし、小林さんにとって身近にあって一番大切なものは、子どもたちの未来なのである。周りの体裁よりも、子どもを被曝させたくないという気持ちが強かったのだ。小林さんは、食べることは生きること、何を食べるかはどう生きるかであると言う。給食を

講演なさる小林英子さん

含め、食物や水など、子どもには選ぶ権利がない。大人がつくった未来へのリスクから子どもを守りたいという一心で、小林さんは自主避難を決意した。

現在、日本の電力は主に原発や火力、水力などによって賄われている。そのうち火力の52％、水力の80％は稼働していない。原発がないと日本の電力は賄えないというのは東京電力の脅しである。一つのことには二つの面がある。便利と不便、危険と安全、喜びと悲しみ。小林さんは、原発がなくて不便でも安全に暮らしたいとおっしゃっていた。

（こもだ しょうこ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年）

◇

小林さんのお話しを聞いて

望月　恵

実際にお話を聴くと、土壌・空間・環境などが汚染されており、やはり福島の状況は悲惨だった。また、自主避難者に対し、地元住民が批判するという事実に驚いた。自主避難をしている人は大勢いると思っていたが、国や市が言う「安全」という言葉を信じて避難せず、むしろ自主避難をする人に対し、復興を妨げていると言うことは悲しいことだと思った。

小林さんは、「原発の電気は全体の約30％を占めていて、今回計画停電が起きたのは震災の影響で火力発電が壊れたから。必要になるのは、真夏の数日間だけであり、その数日間のためだけに危険な原発を作るのか。」と仰っていた。今回の福島第一原発の事故で、小林さんをはじめとした多くの人が被害にあっている。今のような苦しい状況に追い込まれてしまった人にとって、原発は本当に憎いものだろう。『市民科学者として生きる』の108ページの、「会社側が詳しいデータを隠し続けていた」という一文は、今回の震災や事故が発生したことで、本当だったなと思った。

私は静岡県出身であり、幼い頃からいつか東海地震が来るという恐怖を味わってきた。今回の震災は酷いものであり、原発の事故まで起こってしまった。小林さんのお話を聴いて、いつか我が身に起こる地震や原発事故に対し、どのような対応をすれば良いのか考えることができた。子どもを守りたいという気持ち、新しい土地での暮らし、積極的な行動をしている小林さんは、本当に強く、素晴らしい方だと感じた。

（もちづき めぐ・社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年）

小林英子氏からは、偶然にも、本誌18号について次のようなお便りを頂いていました。編集者として驚きを感じるとともに、ふかく激励される思いをもちました。

「…地域交流センター通信を拝読しました。図書館を訪れたときに手にとりました。余震が続き、なかなか眠りにつくことができなかった夜、棚に置いていたこの冊子を手にしました。私は今回の震災で、主人の実家のあるこの山梨へ家族6人で来て、暮らしをなんとか始めています。また福島へ戻りたいという気持ちがあるものの、この現状。先が見えず、日々の生活には穴が、見えない、誰にも見えない大きな穴があいている、（その）今、皆さんが作った通信を見たとき、ちょっとだけうまりました。〈リスにクルミを…〉を読み、小さな積み重ねを丁寧にしている人たちを知り、現実を少し離れることができ、また7～8年先という未来を見ることができ、涙が出そうでした。

（そのような）活動がたくさんの人の共感を得て大きな輪に広がり、すべてはつながり共存していくことが、そのバランスの大切さが、小さな子どもたちへも伝わっていくとよいなと感じました。ありがとうございます。

編集はたいへんなことがおありでしょうが、がんばって下さい。」

３・11の都留文科大学
～一職員の記憶ノート～

■ 今泉圭一朗

普段通り窓口で機材を返却しに来た学生の対応をしていた時、最初はよく分からなかったが地震が来た。地震が起きたらすぐにすることといえば、エレベーターの確認だった。まだ揺れが続いている中、本部棟、1号館、2号館、自然科学棟の状況を見に行った。揺れが大きかったためか、エレベーターはすべて停止していた。本部棟の前に戻っても揺れは続いていた。耐震補強を終えたばかりの本部棟が揺れていた。

揺れが続く中、2号館へ向かう（揺れがおさまってからとかそういうことは頭になかった）。部活動をしていた学生たちが次々と施設から出てきた。施設の前に着いた時には、ほとんどの学生と教員が外へ脱出していた。中期試験の採点のため、春休み中にもかかわらず教員が普段よりも多く学内にいた。揺れがおさまるのを待って、施設の中へ入り、逃げ遅れた人がいないか、エレベーター内に取り残された人間がいないか、確認して回った。

確認作業後、教員の一人が「６Ｆの学科事務室にラジオがあるので、取りに行きたい。」と言い、一部の教員たちとともに、一度、６Ｆと３Ｆの研究室に戻った。学科事務室に置いてあったラジオから、震源と地震の規模を知った。余震は最上階にいたためか、大きな揺れに感じた。しばらくの間、６Ｆにいた。その時下をのぞいてみると、学生や職員、清掃員たちが、施設から離れていた（危ないと判断したのだろうか）。ラジオから情報を得ていると、また大きな揺れがやってきた。施設内にいる教員たちも続々と階段を降り、避難を始めた。教員たちが全員避難したところで、内部を再確認した。

その後、学生や教員が施設に入らないよう、入り口で職員が見張り、耐震のしっかりしている新図書館への避難を促した。懐中電灯とありったけの単一の電池を持って行った。施設施錠の関係で、職員は必要なものだけ持って、図書館へ避難した。この時、学生達が続々と集まってきた。

停電状態のため明りや暖房が使えず、さらに水をくみ上げるポンプが作動しないため、用をたすにも高架水槽のある本部棟か1号館のどちらかでしかできなかった。夕方、日が落ちる前に発電機が大学へ来た（小学校から借りてきたもの）。発電機が来たことで、明りと暖を確保できた。市役所の方から、毛布の支給と宝の山から教員の一人を通じて、シュラフとテントが届けられた。

発電機は、ガソリンで動いているため給油が必要になった。そこで大月の方は電気が復旧していると情報があったため私は職員2名と一緒に公用車で買いだしに出かけた。赤坂駅付近までは、停電の影響で不気味なほど真っ暗だったが、禾生駅から向こうは、煌々と電気がついていた（どうやら回線が違うらしい）。そのため、大月まではいかず、田野倉でガソリンを購入し、買い出しをした方がよいのか確認をとった（携帯がほとんどつながらず結局、大学直通にかけた）。すると、学生が続々とやってきて、百人近く図書館に集まっていると言われた。田野倉のスーパーに行ったところ、棚にはほとんどモノが無く、あるのは、菓子類ばかり…。それでも、かなりの量を買い込んで、大学へ戻った（途中、コンビニにも寄ったが、ここにもほとんどモノは無かった）。やはり禾生駅から上（かみ）は真っ暗だった。大学に着いて、買ってきたものを長机に広げると、「あっ」という間に無くなっていった。かなり買い込んだつもりではあったが。

日が変わる一時間ほど前に帰宅するよう促され、暗闇の中自宅へ帰った。自宅は思ったほど物は散乱しておらずどこも壊れてはいなかったが、当然明りは無く、ロウソクが用意されていた。

部屋に戻りマグライトと小さなＬＥＤライトを使って、明かりをともした、ラジオをつけて情報を得ていた。朝方電気が復旧するまで眠ることはできなかった。

（いまいずみ　けいいちろう・地域交流研究センター職員）

都留文科大学　夏季節電対策について

■高山竜一

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により、東京電力管内及び東北電力管内の電力供給量が大幅に低下した。このため、昨年並みのピークを想定した需要を考えた場合、電力量が不足する見込みであり、官民一体となった節電対策がとられることとなった。

政府は、「夏季の電力需給対策の骨格」に基づき、7月から9月の平日の9時から20時の間における最大使用電力を昨年比15％抑制する目標値を設定した。また、契約電力が500kw以上の大口需要家においては、電気事業法第27条の規定により電気の使用が制限され、違反した場合には罰金が科せられることとなった。

本学は、契約電力800kwであり、大口需要家に分類される。これまでも節電に努めてきたが、今夏の節電対策においては、今まで以上に積極的に節電に努めることが要求された。そこで、学内全体で取り組むための、独自の目標値の設定や、取り組み内容を検討し、学生や教職員の理解が得られる範囲で、可能な限りの節電対策を行なうこととした。なお、本学の電力消費には、次のような特徴がある。

1　平日の午前9時頃から午後8時頃までの使用電力は高い状況が継続するが、夜間は昼間に比べて20％程度の消費となっている。

2　休日（土・日・祝日）の電力消費は、昼間の時間帯を比較すると平日に比べ50～60％程度となっている。

3　東京電力提供の資料によると学校における電力消費の内訳は照明等が約55％、空調用エネルギーが約13％占めるとされており、本学についても詳細なデータは保有していないが、使用状況を勘案すると全体の70％程度が照明やコンセント、空調設備による消費と考えられる。

これらを考慮し、節電に向けて取り組むべき事項を決定した。その具体的な内容は以下の通りです。

◇

節電に係る数値目標として、前年同月値と比較して使用最大電力及び使用電力量を20％抑制する。

◇

目標達成に向けた具体的な取り組みは次の通り。

○照明について

・通路や教室等の照明を間引く（場所により30～70％程度）

・教室の蛍光灯を省エネタイプに変更

○空調について

・冷暖房機器の温度設定は、冷房：28℃、暖房は19℃を目安とする

○OA機器・動力等

・長時間使用しないパソコンは電源停止またはスタンバイモード

○その他

・教職員への節電意志の啓発など

節電対策は、6月から徐々に行ない本格的に7月から開始した。その結果、7月の使用最大電力は▲21・38％、使用電力量は▲33・27％、8月から9月の使用最大電力及び使用電力量も▲30％以上を達成した。とくに7月は、昨年の実績をみると契約電力を上回って使用する日もあり、目標達成は非常に厳しいのではないかと危惧する中で、気象条件に助けられたこともあるが、学生及び教職員が一体となり節電に取り組んだ結果、本学独自の目標値を達成することができた。

国は大口需要家に対する電気の使用制限を2週間前倒しして東京電力管内では9月9日で終了としたが、使用制限解除後も15％の需要抑制は努力義務として残すこととした。本学においても、冬季の電力需要がひっ迫するおそれがあることや、省エネの観点から、引き続き節電に努めていきたいと考えている。

なお、今回の節電は、短い準備期間で高い削減率が求められ、苦慮した経緯がある。今後、節電を継続していくにあたり、省エネ型製品の導入の促進や使用電力量を下げる使い方等に取り組み、無理のない節電に努めていきたい。

（たかやま　りゅういち・本学財務・会計担当）

情報を共有する観察会

■西　教生

地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門が主催する自然観察会が、6月18日と7月16日におこなわれました。これらの観察会は都留市の広報で参加者を募集し、学内の掲示板やHPにも情報を掲載して参加者を募りました。

6月の「初夏の森を歩こう」には9名のかたの参加がありました。午前9時に富士急行線の都留文科大学前駅に集合し、そこから大学の東側を通ってうぐいすホールを目指します。やまびこ競技場の前を通過して附属図書館で解散となりました。道々、学生や教員などの観察会スタッフがそれぞれの担当の生きものを紹介していきます。アンケートには参加者から、「子どもを学生さんにおまかせして、私自身とても楽しませていただきました。子どもも楽しかったと思います」という意見が寄せられました。

7月の「夏の森を歩こう」の参加者は6名でした。午前8時に都留文科大学前駅に集合し、今回は楽山公園を目指します。日差しの強い時期でしたので、なるべく日影の多い場所を観察会のコースとして選びました。今回も観察会スタッフが参加者の方々に生きものを紹介しながら進んで行きます。参加者のひとりである70代の女性には、昭和30年代の大学周辺の様子をお聞きすることができ、観察会参加者と情報を共有できました。今後もこうした観察会で地域の記憶を記録していければと思います。

スタッフの学生からは、「観察会を通して市民のかたと交流することができ、楽しかったです。まだまだ勉強不足であることを実感しました」という声が聞かれました。参加者とスタッフの距離が近く、気軽に会話をできるのがこの観察会の特徴です。参加者の人数や年齢構成を参考にして、毎回違った内容の観察会になるように心がけています。

なお、10月22日に予定されていた「秋の森を歩こう」には12名の申し込みがありましたが、雨天のため中止となりました。

（にし　のりお・本学非常勤講師）

「文大農作物マーケット」の実績・意義・展望について

■狩野　航

２０１１年８月19日、９月24日と都留文科大学敷地内において、二度にわたって「文大農作物マーケット」と銘打ち、都留文科大学生の「農」に取り組む６団体で、自分たちでつくった野菜の販売とそれぞれの活動展示を行なった。

今回のこの企画は二つの意義をもっている。一つは野菜の対面販売を通じて、新たなコミュニケーションの場を作りだすことである。普段はなかなか交流が持たれない他学科の学生や都留市民との交流を、野菜を買うという誰もが普遍的に利用する場を通じて生み出すことが出来る。実際にこれまで実施した２回の中で、大学関係者以外の市民の方や、専門職である農協の職員の方が訪れ、いくつかのお話を聞くことが出来た。とくに、「文大農作物マーケット」を目的に大学に足を運んでくれた市民の方がいたことが、意義のあることだと感じた。今回の活動に、市民の方が大学に足を運びやすくできる効果がある可能性が見えたからである。

もう一つはこの企画に参加するそれぞれの団体が、自分たちの活動を表現する場を作り出せたことだと思う。活動展示や自分たちの活動の成果である農作物を販売することで、文大生で農業に取り組む団体がいくつもあることをこれまで知らなかった学生や市民に対して、自分たちの活動をアピールする機会ができている。この企画を通じて興味を持ってくれた学生が新たに活動に参加してくれるかもしれない。活動を知った市民の方が、畑や田んぼで声をかけてくれるかもしれない。そんな活動の広がりを生み出す可能性を高められたことは一つの意義だと感じている。

以上、「文大農作物マーケット」の意義を書いてきたが、これまでの「文大農作物マーケット」では、上にあげた二つの意義を達成しきれていない。今後はとくに学生に対するアプローチを考え、より多くの人が立ち寄ってくれるためには何が必要なのかを考えつつ、広報などでもっと多くの人にこの活動を知ってもらえるように努力しようとしている。ただ野菜を販売するだけでなく、学生・市民の交流を生み出す場としての機能を高めていけるようにしたい。

（かりの　わたる・社会学科 環境・コミュニティ創造専攻４年）

農ネットに所属する団体の活動紹介コーナーも設置

2011年9月24日　マーケットの様子

平成23年度都留文科大学市民公開講座
『Ｈｅｌｌｏ！英語でワクワク』の開催
２０１１年８月12日
（都留文科大学３号館２階ホールにて）

笑顔あふれる「Ｈｅｌｌｏ！ 英語でワクワク」

■奥脇奈津美

２０１１年８月12日、地域交流センター主催の市民公開講座の一環として、小学校３、４年生を対象に「Ｈｅｌｌｏ！ 英語でワクワク」が開催されました。真夏の暑いさなかにも関らず、都留市内の小学生18名が参加してくれました。

「英語で自分のことを伝える」「英語の音やリズムに慣れる」「英語を楽しむ」という趣旨に基づいて、英語による自己紹介、あいさつ、色、数字、動作に関する基本語などについて、歌やゲームを通して身体を動かしながら学ぶ英語活動を行ないました。学生スタッフとして活躍してくれたのは私の英語教育ゼミに所属する英文学科の３、４年生９名で、４月から週１回、講座の内容について打ち合わせを重ねてきました。

普段から英語教室に通っていて英語が自然に口から出てくる子どもから、英語に触れるのがほとんど初めてで緊張している子どもまで、参加してくれた小学生の英語の学習状況はさまざまでした。中には英検３級をもっている４年生もいたほどです。今年４月からすでに開始されている小学校の英語活動の場においても、状況は同様なのでしょう。

講座開始直後こそ緊張した雰囲気もありましたが、そこは小学生、「最初が肝心！自己アピールで笑いをとって、まずは小学生の心を掴もう！」と行なった我々スタッフの個性あふれる自己紹介の効果もあってか、すぐに打ち解けた雰囲気となり、それからの３時間は、「子どもたちの笑顔が全てを物語っていた」という保護者の方の感想にもあった通り、充実したものとなったと思います。

「今日きてよかったです」「さいしょはきんちょうしたけれどなれてきた」「楽しかったから、春またやりたい」という小学生たちの感想、「個性を発揮しつつ、自己をアピールするという発表は英語だけでなく全てにこれから役立てる良いお手本になりました」という保護者の方からの感想に手ごたえを感じ、勇気づけられながら、次回の開催も考えていきたいと思います。

（おくわき　なつみ・本学英文学科教員）

市民公開講座「Ｈｅｌｌｏ！英語でワクワク」に参加された親御さんから、便箋６枚の感想のお便りがありました。ご本人の了解を得て、その抜粋を掲載します（タイトルは編集部が付けました）。

ぜひ続けてください！

■井上玉貴

８月12日に行なわれました都留文科大学の市民公開講座「Ｈｅｌｌｏ！英語でワクワク」を都留市広報で知り、子どもが参加させてもらいました。その際保護者として見学させていただきましたが、講座の内容がとても充実していてたいへん驚きました。一回限りで終わりになってしまうのが本当に残念に思えて仕方がありませんでした。ぜひ、二回、三回と続けていただけませんでしょうか。今回は無料でしたが、有料でも参加したいと思う親御さんはきっと大勢いらっしゃるのではないかと思います！

今回参加した娘も、楽しくてまた来年も行きたい！と話しておりました。この講座を開講するにあたり学生スタッフの方々は、小学生三、四年生の子どもを念頭に置いて、何度もスタッフ同士で研究し練習されたんだろうなぁ…と感心いたしました。参加している子どもたち一人ひとりに目を配り、心こまやかなご配慮をしていただき、そのお心遣いが、一保護者としてとてもうれしく思いました。

あの場にいらっしゃった学生さん全員が、英語が大好きなんだなぁ…という雰囲気が全体を通して感じられ、それが参加していた子どもたちにも伝わっていたと思います。初めはどんなことをするんだろう…と緊張していた子どもたちの顔がだんだんとほぐれ笑顔にかわっていました。

講座の中の一番初めに行なわれた自己紹介はとても素晴らしかったです。子どもたちのお手本となるように学生スタッフの方々からの自己紹介が始まりましたが、とても個性あふれるもので、日本人には足りないジェスチャーを交えての紹介でしたが、見ていてとても勉強になりました。

今の親世代のときは、中学入学とともに英語教育が始まり、英語に四苦八苦しています。その親世代が、子どもには英語で苦労させないようにという思いから、子どもを英語教室に通わせている話を耳にします。幼稚園でも英語教室が広がっています。小学五年生からはじまる英語教育についていけるかどうかという親としての不安もあるなか、やはり都留文科大学の小学三、四年生対象の英語講座はほんとうに魅力的なものとして親の目のなかに飛び込んできました。

全体を通して遊び心いっぱいの内容で、子どもたちのワクワクドキドキ感が増し、英語に興味が湧くものでした。今回ゲームで覚えた英語は、学校のお楽しみ会や地域活動のゲームとしても、きっと子どもたちが楽しめるものになるでしょう。すばらしい講義をどうもありがとうございました。

（いのうえたまき・都留市民）

人権紙芝居「たねをまこう」の制作にかかわって

■酒巻洋一

美術教室では、地域貢献授業の一環として山梨県人権擁護委員である石井篤子先生からの依頼により、人権紙芝居を制作しました。この紙芝居は人権擁護への意識の啓蒙を目的として委員の方々の活動に用いられるものです。

従来使用されていたものは長年使用されて傷みが激しく、新たに大型で児童へ伝わりやすい紙芝居の制作を望む声があり、以前より相談を受けていたものです。実際の制作は3・4年生有志が主体となり、本年度4月から始まりました。

当初、制作日程と学生個々のスケジュールが合わず、共同での作業がなかなか進みませんでした。私はこの制作が途中で頓挫してしまうのではないかと危惧しながらも、彼らを信じ見守ってきました。その結果、彼らの粘り強い努力により無事完成し、委員の方にお渡しすることができました。制作の中心となったゼミ4年生の玉川聡一郎君は、「達成感よりもやり遂げることができたという安堵感のほうが大きかった」そうで、請け負った仕事に対する責任を強く感じていたようです。

後日、完成した紙芝居をお引き渡しするために、石井先生と窓口になっていただいた市役所職員の亀田香世子さんに大学まで来て頂きました。作品の包みを開けた瞬間、われわれの想像していた以上に喜んでいただけたので、私も嬉しさとともに一気に肩の荷が降りた気がしました。かかわった学生たちは「今まで学んでいたことを生かし、形として残るものができたこと、またそれが活用されていくことに、大きな喜びを感じる」と語っていました。

その後も、石井先生はお手製の漬け物を手に、美術教室を訪れてくださりました。人権に関わるお話だけでなく、昔の都留の様子などもうかがい、学生との交流は今も続いています。今回の制作体験は、都留で暮らしていながらも、地域の方々と交流する機会が少ないと感じている学生たちにとって、貴重な体験となったと思います。

文末ながら、本件に御協力頂きました多くの方々に御礼申し上げます。

（さかまき よういち・本学初等教育学科教員）

研究報告会を開催して

■植村憲治

筆者が、保育所幼児を対象として行なっている実験・研究は今年3年目を迎えました。毎年、特別教育研究費の交付を受けてきたこの研究は、幼児が数量と数の概念をどの程度まで獲得しているかを検証するものです。成果は単に学術論文に掲載するだけではなく、地域社会にも還元すべきであると考えていました。そして、8月20日（土）に、「幼児における数を覚える前の数量の概念」という題目での研究報告会を開催することができました。

保護者を含め多くの大人は、数の概念というと、数を唱える能力をまず連想し、それを重視します。報告会では、1から始めて大きな数まで唱えられるということよりも重要で、わずかの数しか知らなくても導入できる概念が多くあることを説明しました。そして、5までの数しか知らなくても、5の束を作る能力と、束で較べる能力があれば、塊で与えられたときは数えられず、多少の比較ができない15個と20個の積み木であっても、自分で、束にした後であれば、どちらが多いかが判断できることを紹介しました。すなわち、数えられる5よりも遙かに多い量を比較できることをお話しました。そのようなことを含めたいくつかの実験結果を報告し、家庭でも簡単に実践できる数量概念を取り入れた幼児とのふれあい方法を紹介しました。

谷村第1小学校の橋中百代教諭に司会をお願いし、最初の20分は宝保育所主任保育士の渡邊きよみ氏に実践報告をしていただきました。2時25分から4時5分頃まで筆者が講演し、最後の25分を質疑応答としました。そこでは、保育士、幼稚園教諭、保護者からの発言を元に活発な議論が展開できました。アンケート結果からは、参加者が熱心に聴講し、高評価して下さったことがうかがわれ、意義深い会が開催できたと感謝しています。

地元を中心に40名以上が参加し、人数にも満足できました。幼児を連れて夫婦で出席したいという問い合わせがありました。大学での種々の催しに興味をもった育児中の夫婦が安心して二人で出席できるためは、幼児を預かる体制が必要であると痛感しました。

6月に思い立って準備も周知も不十分な会でしたが、地域交流研究センターの杉本光司センター長をはじめ、運営委員の先生方、重原達也学生課長、センター職員の今泉圭一朗さん、当日手伝ってくれた学生さんなど多くの方々のご協力で会を成功させることができました。ご尽力頂いた皆様に感謝いたします。

（うえむら　けんじ・本学初等教育学科教員）

平成23年度
都留文科大学現職教員教育講座が開催される

「夏季集中講座」主催：地域交流研究センター

テーマ：教師の子ども理解と学習指導

日時：平成23年7月28日（木）～29日（金）
場所：都留文科大学　2号館101教室

「現職教員教育講座」の感想
～学ぶ楽しさの実感できる授業づくりを～

■堀内美紀子

教員の夏季休業に合わせて開催される「現職教員教育講座」を、これまで何度となく受講してきました。本講座は、慌ただしく日々を過ごす私が一時歩みを止め、日頃の授業実践を振り返る場、授業の本質に立ち返らせてくれる場となっています。

今年も、「教師の子ども理解と学習指導」のテーマのもと、講師の先生方から学校現場での実践・経験に基づく提言や、今日的な教育課題に対応した多様で新鮮な情報をいただき、「一人一人の子どもを理解し、子どもが主体になって生き生きと活動する、子どもの瞳が輝く授業づくり」について、改めて自分なりに考える機会となりました。

小学校では、本年度から新学習指導要領が完全実施となり、授業時数と指導内容が増加し、教科書も大きく変わりました。学校では、これまで大切にしてきた「じっくり考える」「じっくり取り組む」が影をひそめ、なんだか「効率」ばかりが重視されかねない状況です。子どものこだわりや疑問を無視して突き進む授業、教え込みやドリルで点数だけを追いかける授業、学ぶのに手間と時間のかかる子どもを置き去りにする授業の横行が懸念されます。また、「確かな学力向上」を「学力テスト向上」と取り違えられ、子どもたちを追い詰め、学ぶ意欲を奪っているようにも感じます。湧き上がる様々な不安や疑念…。

今回の講座は、子どもとの向き合い方や授業の在り方について、感じていた不安や疑念に応えてくれるものでした。「子どもの存在が受け止められる教室について」「思考錯誤や間違いが大切にされ、学び合いが生まれる授業について」「子どもたちが多様な考えを交流し生き生きと学び合う授業について」―この夏学んだことを生かし、授業の本質に立ち返り、子ども主体の学ぶ楽しさの実感できる授業づくりに努めたい、子どもの笑顔あふれる教室を創りたいとの思いを強くしました。新学習指導要領が全面実施の今だからこそ。

（ほりうち　みきこ・忍野小学校）

【第1日目】7月28日（木）
『講座の趣旨について』
説明：杉本光司（地域交流研究センター長）
『子どもの理解と学習指導』
講師：山崎隆夫（本学非常勤講師）
『学習意欲を引き出す学びづくり』
―社会科教育を通して―
講師：田所恭介（本学非常勤講師）

【第2日目】7月29日（金）
『教科に関する研究講座Ⅰ』
―子どもがわかる授業をつくる・国語―
講師：鶴田清司（本学教授）
『教科に関する研究講座Ⅱ』
―子どもがわかる授業をつくる・算数―
講師：植村憲治（本学教授）

大田堯先生の映画「かすかな光」上映会に参加して

■新藤浩伸

２０１１年７月16日、都留文科大学元学長の大田堯先生をドキュメンタリー化した映画「かすかな光へ」の完成披露試写会が行われました（会場：早稲田大学戸山キャンパス三八号館ＡＶホール）。

満員の来場者を前に、上映に先立ち森康行監督（夜間中学をとりあげた監督作品「こんばんは」などがあります）の挨拶、大田先生の講演が行なわれました。大田先生は、「ちがう」「かかわる」「かわる」という視点から、学習の歴史を生命の歴史と重ねて語られました。

映画では、大田先生の半生が綴られながら、教育への思いが静かに、しかし情熱をもって先生自身の言葉で語られていました。日々の暮らしやさまざまな人との交流の場面もあり、時折笑いも生まれていました。谷川俊太郎さん自身による詩「かすかな光へ」の朗読、林光さんの音楽、山根基世さんのアナウンスが、その世界を包むように織り込まれていました。また、都留フィールド・ミュージアムも紹介され、今泉吉晴先生、北垣憲仁先生も登場し、自然のもつ魅力が豊かに伝えられていました。

会場前のロビーには、大田先生とかかわりのある埼玉の「みぬま福祉会川口太陽の家」で作られたアート作品などと並び、都留フィールド・ミュージアムの発行物も数多く置かれ、多くの方が手に取っていました。

当日のアンケートには、10代から80代まで多くの方からの反響が寄せられました。私自身もこの上映会に影響され、後日都留フィールド・ミュージアムを訪ねました。北垣先生にご案内いただき、ミュージアムとしての面白さだけでなく、地域との交流のなかで生み出される知、学生さんたちの学びの深さを実感したところです。

映画はこののち9月16日まで東京で一般公開され、ゲストトークなどの関連イベントも多く開かれました。全国各地で自主上映も進んでいます。映画を観るだけでなく、そこから交流が生まれることを望む大田先生の思いに支えられ、各地でのつながりが広がるなかで、「かすかな光」は強く確かなものとなっていきます。

（参考：映画公式HP http://kasuka-hikari.com/）

（しんどう　ひろのぶ・東京大学教育学部）

地域交流センター通信

編集後記

「20 号」という記念すべき本号で、「東日本大震災特集」を組むことになりました。「3・11」当日の本学の様子については、今泉圭一朗氏が記してくれています（26 頁）。その日以降のニュースは私たちに衝撃を与え続けました。新学期がはじまっても、同僚の間でも学生諸君の間でも、「3・11」をめぐることがほとんど語り合われていないように感じられました。語る術、なす術を失ったような状況だったと思います。しかし本学を拠点にいち早く被災地救援の活動が始められ、その活動報告を中心に、「緊急集会　東日本大震災を語り合う・第 1 回」（都留文科大学地域社会学会主催）が 4 月 20 日に開催されました（3 号館 1 階ホール）。それ以降の本学のボランティア活動の展開については、12 ～ 18 頁をご覧ください。また本学の複数の教員が、継続的に被災地調査に入っています（20 ～ 21 頁）。6 月 8 日には、社会学科が教授会に対し「提案」を行なっています（23 頁）。こうした取組みの一つひとつを通し、研究・教育の再生の方向を考えていきたいと思います。

次号は、本特集の「続編」とともに、「自然との出会いに心を向け暮らしの伝統を見つめ直す」を特集したいと思います。（畑潤・編集長）

家々の基礎だけが残された釜石の海岸部の集落で、「がれき」の片づけに携わっていた女子学生が、台所だったと思われる一画から、お皿やお椀等、生活のこまごましたものが土砂に紛れて出てくるのを見て、「家とか、大きいものが全部流されて何も残っていないのに、小さいものがこんなにしっかり残っているんですね。不思議な感じです」と言いました。8 月中旬のことでしたが、そのころになると、海岸部の被災地も、塩の成分がだいぶ抜けたようで、食器類の傍らからは、ジャガイモが自ずから芽吹いたのでしょうか、蔓状に実った小芋もたくさん出てきました。「生活が存在した」ことを様々な場面で思い知らされる、そうした作業に携わりながら、学生が多くの気づきを重ねています。

「夏草が茂っていて、一瞬、瓦礫が見えなくなっているけれど、実際には、まだまだなんですね」とは別の学生の言葉です。震災に関わる報道も、徐々に数が限られていく中、自分たちの体と頭に、震災を焼き付けようとするかのように、様々な学生たちが動き始め、そして動き続けています。全容を書きとめることはできないものの、本号を通じて、その一端をお伝えすることができればと思います。（田中夏子・副編集長）

絵・成瀬洋平（本学比較文化学科大学院卒業生）

地域交流センター通信　第 20 号：2011 年 12 月 14 日
編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（編集長・畑潤 副編集長・田中夏子 杉本光司 佐藤隆 坂田有紀子 鳥原正敏 品田笑子 北垣憲仁 今泉圭一朗）
(C) 発行：都留文科大学地域交流研究センター
〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1　tel.0554-43-4341（代）
統括編集者：北垣憲仁